

「Shared Catalogingの光と影 -レコード調整を視点として-」

東北大学附属図書館  
及川 恵美子

<序>

1984年学術情報センター（以下「学情」という）が目録所在情報サービスを開始した年に、筆者は洋書目録掛を去った。この春15年ぶりに附属図書館の目録を担当することになったのだが、和漢書、洋書目録の2掛が今年4月から1掛に統合され、すでにカード作成からOPAC入力へと変貌し、旧世界とのギャップに大きな戸惑いを覚える日々である。しかしながら、“素晴らしい新世界”に身をおいているうちに次第に疑問も生じてきた。目録作業は以前より楽になったといわれるが、本当にそうだろうか。

共同分担目録入力により、1冊ずつ目録をとっていた時代に比べて作業は格段のスピードアップとなった。大量生産されて手に入り易い図書、分野毎の基本図書などは、すぐ目録作成され、利用できるものが多くなった。いわゆるコピーカタログによる省力化は確実に進んでいる。しかしその反面、難しい目録はレコード調整という試練にさらされ、多大の労力と時間を奪われる結果を招いている。それが為に、その調整の煩わしさを避けて学情に登録をしないデータを持つ機関もあると聞く。公にされない、自館内でのみ利用されるデータの存在。

レコード調整を担当して約半年が過ぎた。共同で一つの目録データを作ればよいとするShared Catalogingの理想は、スムーズに行われ成功しているといえるであろうか、という疑問がわいてくるのである。

総合目録データベースを向上発展させる為に、目録の現状と問題点を探り、方向を見いだしたい。情報技術が更に発展するであろう21世紀を迎えるにあたり、情報の海で溺れないように...

## 1. 目録とカタログ

目録：財産目録、管理者（図書館）のため      リストの羅列  
カタログ：商品（資料）カタログ、利用者のため      内容紹介・現物のイメージ提示

目録とカタログの語は、一般的には上記のように区別されて使用されているが、図書館界ではあまり区別されず、「目録をとるカタログガー」というように混然としている。図書館における目録の機能としては、整理してリストアップをすることと、資料の中味をある程度広報することの2点が考えられる。

## 2. カードからOPACへ

カード	OPAC
タイプライター	パソコン
AACR	AACR2R
孤立した作業	共同作業
限定された情報	共有資源

カード時代は一枚のカード上に、いかに資料の情報を沢山盛り込むか（しかも美的に）ということにカタログガーのエネルギーが注がれた。リストアップするということの方にウエイトがかかっていたといえる。固定されたカードまで検索しに行かねばならないということは、利用者が限定される。一方OPACは、図書館まで足を運ばなくとも資料を探せる。これはインターネットによるカタログで商品を選んでいるのに似ている。

OPACによる分担入力は目録を、限定された小さなローカルの世界から、広範な地球規模の世界へと連れ出したのである。

結果：

良くなった点

- ・ILLの増大
- ・目録データ登録の省力化（既存データがあれば）、簡便化
- ・利用者へのデータ提供の迅速化

問題点

- ・目録規則の他にパソコンの操作と学情の規則に習熟せねばならない
- ・従って短期間でのカタログガー養成は以前にもましてより難しくなった
- ・レコード調整：不適切な部分が少しでもあるデータを作ると他から指摘され、作成館は最後まで責任を持たねばならない

## 3. 分担目録入力 (Shared Cataloging)

表1-1によると所蔵件数が約4,200万と膨大なものになっており、年間約500万件の増加、図書書誌件数は約500万、年間約40万件の伸びを示している。学情のデータは増大する一方であり、参加機関も増加するばかりである。とりもなおさず登録する前の書誌同定作業は、ファイル内のデータが増すほど困難になっていく。結果、重複レコードも増し、それに伴うレコード調整の煩雑な作業も増すばかりとなる。

10数年を経た学情のNACISIS-CATであるが、レコード調整に携わる現場の目録担当者達の嘆きが過去数年間、研修レポートや雑誌論文でよく見受けられる。にも拘わらず、何らの改善もされないまま、品質管理の細かな作業は（学情のスタッフの方も含めて）自己犠牲的に、各個人に任せられたままの状況は義憤に堪えない。全国のカatalogガーたちの努力と忍耐は臨界に達しているのではないだろうか。

## 4．レコード調整の曲がり角

### 4．1．問題点

学情に報告される重複レコード件数は、年間約 2,000 件台に達しており（表 1 - 1）、機械処理のみではできない部分を人手によって処理している。又、全国で書誌データに修正を加えられる状況は新規とほぼ同数で、単純な修正から、同定に必要なレコード調整の作業まで含めると 5 日間で約 9,000 件は、かなりの数といえる。新規に入力したと同時に修正が加えられているといえよう。こうした分担入力作業によって、利用者にとってよりよいデータが作成されれば望ましい。しかし、必ずしも高品質のデータが維持されているとは限らない。

組織見直しなどによる目録部門の人員減（独立行政法人化問題）  
人事異動により、熟練者が養成されにくい  
マニュアル類が多く、初心者には扱いが難しい

こうした理由などによって、目録データの維持管理は厳しい面がある。学情も平成 12 年度には情報学研究所に組織替えすることになっており、大学同様に厳しい環境にある。参加機関をサポートする役割の学情が、これまで通り少ないスタッフで品質管理をコントロールするのは、人手を必要とするだけに困難であると思う。学情と参加機関の関係を見直さねばならない時期であろう。

### 4．2．遡及入力との関連

遡及入力は全国規模で推進されてきている。学情で遡及入力指針が定まり、遡及によるデータはレコード調整の対象外となった。しかしながら、遡及入力事業がどんどん進むのに、現実問題として調整をしないままであれば、重複書誌が増加するばかりとなる。指針はあっても、結局は修正可能であれば、レコード調整をせざるを得ないのが現状である。又、率先して遡及入力を進めたデータ豊富な機関の場合は、結果的に調整の作業も増加することになる。

東北大学の場合、1989 年から遡及入力が開始され、過去 10 年間で約 36 万冊を終了した。表 2 をみると、1999 年 4 月から 9 月末まで調整を受け付けた分（本館のみ）、総数 120 件中学情の目録サービスが実際に動き出した 1985 年を区切りとすると、1985 年以前が約 7 割。古い出版データの方が調整対象となりやすい。（表 2 - 1）

表 2 - 2 と表 4 をみると、レコード調整の比率は登録冊数に比べ英語の方が上位となっている。外国語ということで、解釈の相違などにより目録作成に困難さを伴うことによるからであろう。124 日間で 120 件の受付処理（オンラインニュースレター分は含まない）は多いのかわからない。数の多さではなく、内容が面倒で時間のかかるもの - 別書誌にするかどうかで判断に迷うもの、所蔵館が多く連絡に手間取るもの（8 館以上は学情に依頼しているが）など半日から一日を費やすこともある。連日処理をしないと、図書の整理同様に滞ってしまい、催促やお叱りを受けることもある。図書の整理よりも優先させねばならないこともあり、ジレンマで苦しむ羽目になる。

#### 4.3. 表2と3による学情と東北大との重複要因となる修正項目の比較

字体，スペル，ヨミ（分かちのゆれも含め）などは両者に多い。発見館で修正可能項目なのにレコード調整が行われている。ケースにもよるが，できるだけ煩わしさは避けたい。

書誌単位やタイトルに関連したものは，学情では多い。学情まで判断を仰がないと難しい場合が多いからと考えられる。

東北大で多いケースは，PTBL（集合書誌）の項目である。刷，ペーパーバック版の扱いなど解釈の相違によるものは難しい。学情で指針が定まっていない頃入力されたものは当然調整作業が多くなる。

#### 5. 変容する目録

日本図書館協会が1997年に行った調査によれば（註1），目録データベースの収録対象についての質問の結果は以下の通りである。（大学図書館の場合）

* 作成館数	新規受入全資料	一部の資料除外	未回答
803	583 (72.6%)	209 (26.0%)	11 (単位:館数)

\* 対象外とする資料の内訳は

中国語・韓国語など特殊言語資料	.. 54館
逐次刊行物	..... 46
視聴覚資料	..... 34
古典籍・貴重図書	..... 14
パンフレット類	..... 11

以上のように大学図書館ではデータベースに収録されないものが26%ある。特殊言語や古典籍など作成の難しいものの扱いに，カタログガーは苦勞する。そこで分野別あるいは言語別で参加機関の特色を考えて，全国にオーソリティーとなるチェック機関又は，新規入力機関を設けるという案を提示したい。丁度外国雑誌センター館が，分野毎に責任分担収集しているように。センター館とサブを設けて，全国の書誌データに眼を届くようにするのである。カタログガーは自館のみの入力ばかりではなく，広い視野を持つことになり，ともすれば「目録のための目録」になりがちな部分から少しでも解放されると思う。

東北大（本館）の言語別統計3年分をみると（表4）まさに世界中の言語を扱っている。特徴としては，中国語，チベット語などアジア系が多いようである。このように全国的に特色ある機関を検討し，学情からの委託という形で責任館を選定する。責任館は特色を生かしながら，レベルアップを図ることになる。

今後目録は外注などによって，益々コピーカタログギングとオリジナル入力との作業レベルの差がでてくるであろう。しかし自館の蔵書の作成を全て外部任せにはできない。最終

責任はカタログガー（目録専任がいなければ図書館員）にあるし、蔵書の特徴や購入の傾向位は知っておくべきであるから。責任分担入力によってカタログガーの専門性を培っていきけるのではないか。

学情では参加機関同士の協議が不成立になった場合や、責任館でも処理できないケースのみを扱うことにすればよい。責任館と学情との連絡は密にせねばならない。現在のデータベース実務研修を、責任館での目録作成上の問題点に絞ったものにするなどの方策が考えられる。責任館の負担が大きくなってくるが、学情サポートセンターとしての役割も担ってくるので、定員をつけることにするなどの対策が必要であろう。あるいは、学情との人事交流も望ましい。

目録という枠にとらわれず、メタデータをも扱うようになれば、コンピュータ関連業務との連携も必要になり、幅広い人材が求められる。人的予算が無理であれば、残される道はチェック機関を第三者（外部機関）に委ねるほかはないだろう。

これまでみた少ないデータからでも、現場のカタログガーの目録作業が楽になったとは思えない。学情と参加機関との相互の努力によって維持されてきた分担目録入力は、見直しを迎える時期がきているのではないだろうか。

## 6．結び

図書館は図書を扱う時代から、多種多様な資料、そして形のない情報まで広く扱うようになり、情報センターとしての役割を担うようになった。情報は世界を駆けめぐっているが、大事な本当に必要な情報が見えにくくもなっている。情報の洪水は我々の判断力を鈍らせる。判断基準も確たるものはない。データ蓄積や入力に没頭すると、作業の位置づけを見失いがちになる。情報を扱う図書館に、今、取り残され忘れられそうになっているものを考えてみたい。

画面からの情報を利用者（探索者）は一方向的に受け取る。作り手との交流はほとんどない。書かれた文字の集積所であった図書館ではなくなったが、画面上でも文字は残っている。文字という媒体は存在している。目録の歴史は、バビロニアの粘土板に残る文字の歴史と同じくしているといわれる。

文字はソクラテスによれば、パイドロスとの問答で明らかにしているのだが、言葉の影であるといい、ものを書くということの困った点を述べている。「言葉というものは、ひとたび書きものにされると、どんな言葉でも、それを理解する人々のところであろうと、全然不適當な人々のところであろうとおかまいなしに、転々とめぐり歩く。そして、ぜひ話しかけなければならない人々にだけ話しかけ、そうでない人々には黙っているということができない。あやまって取り扱われたり、不当にののしられたりしたときには、いつでも、父親である書いた本人のたすけを必要とする。自分だけのちからでは、身を守ることでも自分を助けることもできないのだから」（註2）

文字が著者の意図から独り歩きしてしまい、不特定多数への伝達の難しさが述べられている。送り手と受け手とは一方通行で対話がなくなる。読書を通じての対話といっても読み手の独りよがりかもしれない。文字と我々との位置は送り手と受け手、画面データと利用者との関係に似ている。テレビやインターネットの情報の氾濫により、必要悪なものま

で受け取らざるを得ない状況は、文字への不満を述べているソクラテスと同じようなものである。

さらに文字について聞いた話として、以下のことがソクラテスの口から語られる。「人々がこの文字というものを学ぶと、記憶力の訓練がなおざりにされるため、その人たちの魂の中には、忘れっぽい性質が植えつけられることだろうから。それはほかでもない。彼らは書いたものを信頼して、ものを思い出すのに、自分以外のものに彫りつけられたしるしによって外から思い出すようになり、自分で自分の力によって内から思い出すことをしないようになるからである」(註3)

ワープロを使っている現代人には耳の痛いことである。文字は、ソクラテスにとっては、備忘録やメモの役割に過ぎなかった。

「技術上の事を生み出す力をもった人と、生み出された技術がそれを使う人々にどのような害を与え、どのような益をもたらすのかを判別する力をもった人とは、別の者なのだ。...あなたが発明したのは、記憶の秘訣ではなくて、想起の秘訣なのだ。

また他方、あなたがこれを学ぶ人たちに与える知恵というのは、知恵の外見であって、真実の知恵ではない。すなわち、彼らはあなたのおかげで、親しく教えを受けなくても物知りになるため、多くの場合ほんとうは何も知らないでいながら、見かけだけはひじょうな博識家であると思われるようになるだろうし、また知者となる代りに知者であるといううぬぼれだけが発達するため、つき合いにくい人間となるだろう」(註4)

ここでいわれる、あなたというのはエジプトの文字を発明した神タウトのことである。タウトがエジプトの最高神タムスの前で「文字を学べば、エジプト人たちの知恵は高まり、もの覚えもよくなる」というと、タムスの答えとして以上のことが語られる。書かれる文字ではなく、語られる言葉が重視される。よき伝達手段は、ディアレクテイケー(対話)である。どんな言葉か。

「ものを知っている人が語る、生命を持ち、魂をもった言葉のことですね」とパイドロスがあいづちをうっている。(註5)

対話のない一方通行の伝達は、現代では当然のようになっている。情報を扱う図書館にいる者として、文字や言葉の意義を時には考えてみたいものである。文字否定の思考をソクラテスは、エジプトから引き出した。古代エジプトの首都テーベの図書館の正面には次のような言葉が彫り刻まれていたという。(註6)

#### 《魂の医薬》

図書館は情報を蓄積、伝達する器や手段としてのみではなく、精神的なサポートのできる《場としての存在》でもありたいと願う。(註7)

誰がために目録は作られ、誰がために図書館は存在するのかを、エジプトの銘句から思い起こすことがあってもよいのではないだろうか。

註：

- 1 . 日本図書館協会目録検討委員会編「目録の利用と作成に関する調査報告書」  
日本図書館協会，1998
- 2 . 藤沢令夫「プラトン『パイドロス』註解」岩波書店，1984 . 60-275.E
- 3 . 同上，59-275
- 4 . 同上，59-275
- 5 . 同上，60-276
- 6 . アンドレ・マツ，ポール・カヴァン，小林宏訳「図書館」(文庫ケジメ，457)白水社，1969 . p.16
- 7 . 竹下研三 もうひとつの図書館 「鳥取大学医学図書館ニュース」v.29, no.1(1998.1)  
図書館サービスの隠された機能として，図書館を「心にやすらぎを与えてくれる所」と  
言及している。

表 1 - 1 . 総合目録データベースの推移 (過去 5 年間) [ 1999.9.3 現在 ]

年	接続館数 (累計)	図書書誌件数 (累計)	図書所蔵件数 (累計)	重複レコード <sup>*</sup> 報告件数
1995	446	3,512,154	21,683,812	2,117
1996	511	3,908,685	26,591,097	2,651
1997	597	4,349,108	32,001,412	2,432
1998	670	4,813,172	38,534,206	2,735
1999	709	4,986,433	41,079,856	

表 1 - 2 . 10月12日 - 10月15日分更新データ [ 1999.10.15 現在 ]

	追加	修正
図書書誌	9,490	9,203
図書所蔵	122,805	16,211

表 2 . 東北大学附属図書館本館のレコード調整 (受付分) [ 1999.4~9月(実日数 124日) ]

## 2 - 1 . 出版年別

	洋	和	計
1986 -	29	8	37
1971 - 85	31	15	46
1946 - 70	14	9	23
1901 - 45	10	4	14
計	84 (70%)	36 (30%)	120

- \* 東北大学では 1987 年以降  
分担入力開始
- \* 1985 年以前は 83 件(約 7 割)
- \* 洋書が 7 割

## 2 - 2 . 言語別

	言語	件数	%
1	英語	52	43.3
2	日本語	36	30.0
3	ドイツ語	16	13.3
4	フランス語	11	9.2
5	ロシア語	4	3.3
6	イタリア語	1	0.8
計		120	99.9

\* レコード調整受付分中に、入力件数の多い中国語(表 4 参照)はない。東北大の場合、学情の入力方針が定まっていなかったため、学内のみの入力となっている。学内システムが新 C A T 対応になったなら学情登録の予定である。

## 2 - 3 . レコード調整受付の修正事項内容

順位	フィールド, 項目 (フィールド毎の総件数)	和書	洋書	計	
1	P T B L ( 3 4 )	・シリーズ追加 ・シリーズの確認 ・リンク先変更 ・vol から中位へ	4 1  2	2 1 5 1 2	2 5 6 1 2
2	P U B ( 1 8 )	・出版地, 者確認 ・リプリントかどうか ・著作権年 ・刷と月の確認	4  4	1 1 1 7	5 1 1 1 1
3	E D ( 1 4 )	・ペーパーバック版の追加 ・版と刷の解釈の相違	4	8 2	8 6
4	レコード ( 1 4 )	・重複による全ての削除	6	8	1 4
5	P H Y S ( 1 3 )	・高さ, 頁数などの確認	4	9	1 3
6	T R ( 1 2 )	・転記ミス, 字体の修正 ・タイトル関連情報の追加	5	3 4	8 4
7	V O L ( 8 )	・vol, pbk の表示追加 ・バランスしない書誌	3 1	4	7 1
8	A L ( 7 )	・リンク形成 ・2, 3 番目の著者追加 ・スペルミス, Jr.の有無	1	2 2 2	2 2 3

表3 . 重複図書書誌レコード作成の推定される要因 (学情への報告による)

順位	項目	件数
1	タイトル・タイトル関連情報の解釈の違い	1 3 7
2	書誌単位の解釈の違い	1 3 2
3	字体 (新旧等) の違い, 綴りの違い	6 6
4	分かちのゆれ	6 4
5	装丁, 版の違い, Y E A Rの違い	6 0
6	和洋間の重複	4 2
7	ヨミの違い	3 7
8	親の違い, 集合書誌単位の記述の有無	3 2
9	I S B Nのあるなし	2 7
10	P a p e r b a c kの扱い	2 5
10	著者の違い	2 5
12	出版事項の違い	1 9
13	R E C O Nファイル	9
	その他のデータの違い・原因不明	3 7 2

(学情でまとめたある年の数ヶ月分)

表4 . 東北大学附属図書館（本館）の言語別所蔵登録冊数

[ 1996 年 4 月 - 1999 年 3 月 ( 3 年分 ) ]

言語： 43 種類

合計： 88,680 冊

( 上位 6 言語で全体の 98.41% )

順位	言語	冊数	%
1	日本語	48,781	55.00
2	英語	18,102	20.41
3	中国語	11,352	12.80
4	ドイツ語	5,669	6.39
5	フランス語	2,181	2.46
6	ロシア語	1,194	1.35
7	韓国語	316	0.36
8	スペイン語	181	0.20
9	ラテン語	174	0.20
10	チベット語	164	0.18
11	イタリア語	104	0.12
12	オランダ語	75	0.08
13	古代ギリシア語	67	0.08
14	アラビア語	61	0.07
15	梵語	52	0.06
16	蒙古語	39	0.04
17	ペルシア語	35	0.04
18	多言語	26	0.03
19	ヒ・チ・ラ・マ-等	13	0.01
20	アルメニア語	10	0.01
21	不明	9	以下略
22	ポルトガル語	8	

順位	言語	冊数	%
22	古期プロヴァンス語	8	
22	スワヒリ語	8	
25	古高ドイツ語	7	
26	その他の言語	5	
27	ヘブライ語	4	
27	ヒンディー語	4	
27	イラン語	4	
27	パーリ語	4	
31	インド諸語	3	
31	ウイグル語	3	
33	ブルガリア語	2	
33	トルコ語	2	
33	ベトナム語	2	
33	スロヴェニア語	2	
33	中世英語	2	
38	チェコ語	1	
38	エウエ語	1	
38	アイスランド語	1	
38	インドネシア語	1	
38	ジャワ語	1	
38	ロマンス語	1	
38	ウズベク語	1	